

点描 ポーの日本伝来考

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

42

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

1995-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006936>

点描 ポーの日本伝来考

宮 永 孝

一八七五（明治八）年九月二十九日の昼さがりのことである。メリーランド州ボルチモア市であることが行なわれようとしていた。アメリカの東部大西洋岸の市は、この時期すでに秋風が立ち、樹々の葉もそろそろ色づくころである。ボルチモアのフエイエット街とグリーン街の交差点に長老教会があり、墓地の南西の一区に新聞記者を含む人のむれがみられた。とりわけ寺男のジョージ・W・スペンス、ひつぎを開ける役のW・L・ツードルら二人は、この日の主役であった。

この日からさかのぼること二十六年前——一八四九（弘化三）年十月七日の午前五時ごろ、アメリカ文学の奇才エドガー・アラン・ポーは市の「ワシントン・カレッジ病院」で息をひきとり、二日後の十月九日の午後、ごく限られた友人と血縁者に見守られながら、長老教会の雑草の生い茂った墓地に埋葬された。が、埋葬場所には久しく目じるしとなる石板もいわんや墓石も置かれず、土の小さな盛りあがりだけが、埋葬地を示す唯一のものであった。やがて時が経過するにつれ、その目印は消え、墓の上には雑草だけがはびこり、ポーは無縁仏さながらに打ち捨てられた。

そのうちにいとこのネールソン・ポーが、この薄幸詩人の墓標（グレストン石）をヒュー・シッソンという同じ市に住む石屋に注文した。それにはラテン語で「エドガー・アラン・ポーの遺骸は、ついにこの地に葬られ、幸福である。一

八四七年十月七日死去。享年四十歳」といった碑文が刻まれていた。しかし、いざ墓標を埋葬地の上にすえる段になって、「ノーザン・セントラル」の貨物車がシッソンの石材置場に飛びこむといった事故が生じ、ポーの石碑もそのときこなごなになってしまった。

この予期せぬ出来事に墓碑の建立はさたやみとなり、その後も墓石は立てられることはなかった。けれど長老教会の計らいによるものか、No. 80 と刻んだ砂石の目印程度のものが、生前のポーを知る寺男のジョージ・W・スペンスの手で埋葬地の上に置かれた。そしてさらに時が経過した……。没後、ポーの名声は徐々に上ってゆく。そのうちに郷土が生んだ奇才を顕彰しようとの声が上がリ、ボルチモアのセイラ・シゴニ・ライス嬢やその他の住民が記念碑建立のために醜金運動を展開するようになり、一八七五年十一月十七日ついにその除幕式を行なう運びとなった。しかし、それに先立って改葬の要が生じた。まず正確なポーの埋葬地をつきとめ、遺体を埋りおこなねばならない。

寺男のジョージ・W・スペンスは、その仕事を極開けのベテランであるW・L・ツードルにゆだねた。かれは生涯に二千もの棺を掘りおこしたといわれる人で、改葬に携った経験を豊富に有している。一八七五年九月二十九日の午後、日が西に傾くころ、ツードルのシャベルはついにポーが眠る土の上に入れられた。そしてその先が一メートル五十センチの深さに達した時、何か固いものにぶち当たった。ポーの棺のふたに当たったのである。やがて棺が姿をみせる。人手を借りてそれをゆっくりと地表に引きあげる。棺はほとんどくさっており、地面の上に置いたとたん、くずれてしまった。開いた口から、一同かたずをのみながら、そっと中をのぞく。ポーの骸骨が見える。ボルチモアの『ズイ・イヴニング・ニューズ』紙の探訪記者はその光景を、ひとみをこらしながら見つめている。翌日、かれが同紙に発表した記事は次のようなものであった。

いうまでもなく肉体と屍衣はとづくにちりとなり、骸骨だけが残り、頭蓋骨には髪の毛がわずかについていていた。これだけが生前の肉体をしのばせるものである。骸骨は完全な状態を保っており、両腕は胸の上で組まれている。あばら骨はすでにバラバラになつてゐるが、左右にちゃんと残つてゐる。上顎の歯は、棺を引きあげるときに抜け落ちたものにちがいない。頭蓋骨のまわりに散らばつてゐるからである。しかし、下顎の歯はしっかりとしており、一本も欠けてはいなかった。歯の色は真珠のように白く、歯の保存状態もきわめて良好であつた。

スペインはそれより、くちた棺を木の箱におさめ、記念碑が立てられることになつてゐる場所（現在の墓地入口のそば）に掘つておいた穴に静かに下ろした。かくして夕やみが迫るころ、ポーの遺骸は再び大地に戻ることができたのである。

一八七五年十一月十七日——この日、ボルチモア市の文化人、各界の名士、生前のポーを知る人々、合唱隊などの参列を得て、記念碑（ジョージ・A・フレリックがデザインしたもの）の除幕式が長老教会で挙行された。それは純白の大理石製である。高さは八フィート。中央にポーの肖像が円形の浮き彫り（緑色）となつてゐる。

筆者は目下、ボルチモアでわずか四十年の短い生涯を終えたアメリカの国民的作家ポーが、遙か太平洋を越えて、東洋の小国日本に伝わつたこと、その人と作品がわが国においてたどつた運命を実証的に描こうとしてゐる。ポーほど長い期間広くわが国で読まれてきた外国作家はいない。ポーが日本に紹介されて以来約百二十年にもなるが、一般読者ばかりか文学者、研究者にも親しまれ今日に及んでゐる。ポーの生国アメリカでは、その詩や短篇が教科書で使われてゐるばかりか、各種の版本が店頭を飾つてゐるため、その名を知らぬ者はほとんどいないといつても過言ではない。一方、わが国でもほぼ同じようなことがいへそうである。ポーの人と芸術作品について深い知識を持ちあわせていなくても、名前ぐらい知つてゐる日本人は多い。それほどポーは日本人に親しまれ、愛されるアメリカ作家なのであ

る。

ポーが読書界や文壇や学界で愛好されるのはなぜであろうか。何よりも外国文学に携さわる者の間で学究的研究が今もつづけられている大きな理由は何であろうか。社会的、文化的、人種的にもまったく異質な日本において、何よりも一世紀以上にわたってポーの作品が読みつがれてきたのはなぜであろうか。一外国作家の日本伝来ととくに日本の近代文学に及ぼせるその影響について究める学問分野のことを、今日世界の学界は「比較文学」（比較文学史）と呼んでおり、この新しい学問の淵源はフランスに在る。筆者の研究方法も比較文学のそれに法のりつたものである。フランス派比較文学の述語を使えば、ポーという発ホトケ動者がわが日本でどのように迎えられ、どのような運命をたどったのか。いかなればポーの名声の日本侵透と媒介者（紹介者、翻訳者、評家）と読書的影響を受けた受容者（文学者）の研究が中心になる。この研究の主なる素材は、明治期から今日までに刊行された受容国日本の大小の新聞・雑誌である。この約百二十年間に活字となったポーに関する記事を極力探査し、それらに目を通し、小さな一見無価値に見えるものもなるべく原文を引くようにして記述を進めている。そうすることがわが国におけるポーの名声の侵透の実証性を倍加するとは思わぬが、単にカタログ的に文献名を挙げてでも理解に資することができぬと考えたからである。新聞・雑誌の博搜の次に行なうべきは、これまでに刊行されたポーの訳本や研究書、学術論文にも広く目をとおし、その概略を知り、それぞれの材料がもつ特徴と意義を捉え、次いでポーの作品を味読したと思われる作家の全集に目を通し、ポーについての言及を探し出す仕事である。こうした忍耐のいる仕事を行なうには、図書館に足しげく通い、蔵書カードをひき、疑問があれば司書にたずね、求める文献が無いときは、他の諸機関へ紹介状を書いてもらい、まめにどこへでも出かけることが必要である。何よりも研究の能率を上げるために図書館の書庫に入らねばならぬ。書庫は孤独をひしひしと感じる仕事場である。誰も仕事を手伝うものがない場所である。たよれるものは自分だけと

いった所で、自己との格闘場である。筆者はうす暗い書庫の中でいくどせきばくの感を覚えたか知れない。幸い早稲田大学中央図書館は、他大学の追隨を許さぬじつに豊富な文献資料をもっているから、研究上大いに利益を得ることができた。同図書館は利用の仕方しだいでは宝の山である。十分誇るに足る大学図書館の一つである。筆者はこの図書館からこれまでにどれだけ裨益をうけたか計り知れない。この大学で学ぶ縁をもったことに満腔の感謝を献げたく思う。

筆者が、この研究を進める上で方法論的にいちばん学ぶ点が大きく、かつ刺激と感銘をうけたのは、後述のフェルナン・バルダンスベルジェ（比較文学者、一八七一一一九五八）の大著『フランスにおけるゲーテ』⁽³⁾（一九〇四年、ベルジェ（当時、三十歳）の行ったことは、あまり人のやらぬ方法であった。かれはフランスにおけるゲーテの運命を跡づけるに際して、まずリヨン大学の図書館の書庫にこもり、数年間、一七七〇年前後から一九〇〇年頃までの約百二十年間分の大小の雑誌や新聞の類にひろく目を通し、次いでゲーテに関する第一級の文学者の全集はいうに及ばず、マイナー作家たちのそれも余すところなく調べ抜いた。バルダンスベルジェは学者としての天分に恵まれていたことも事実だが、少年の頃より大変な努力家でもあった。幸運にも十分な材料に恵まれたかれの研究の遂行を助けたのは、みずから読書によって培った豊かな学殖と個々の歴史上の出来事のうらに潜む現象を見抜く鋭い眼と俊敏な頭脳であった。周到な準備と学識と努力の結晶が先の大著だが、千辛万苦を重ねて書き上げたものだけに、この著書をじっさい手にとるとおのずと深い感動が伝わってくる。

ところで日本において外国文学を研究するにあたり、原作や作者について書かれた研究書や伝記を繙くとき、そこから受ける印象は稀薄であり、実感と迫力に乏しいことがよくある。一言でいえば、心に浮ぶ心象はいまい模糊とし、

濃い霧がかかった世界が目の前に広がっている。本国人であれば、その魂にまで迫るものでも、われわれは深く感じることはない。作品を生み出した風土や文化的背景についての知識や教養が読者の側に欠如しているのだから、当然といえばそれまでである。何よりも書かれている言語そのものに十分に通じていないのだから、読んでもよく理解できぬのはあたりまえである。さらに文学作品の研究となると、批評力・鑑賞力が不可欠であり、これらが研究者の側にないと、研究の名に値いするものは到底生み出せぬ。一方、伝記のような考証学となると、地理的な不便もあって、われわれ日本人には手も足も出なく、いきおい本国の研究者の独壇場となってしまう。その結果、われわれは海への向うの研究者が書いた個人の生涯の記録にすぎり、それをありがたがって読んだり、自分の興味を惹くテーマについて書かれた論文や研究書を見い出すと、そこから着想や構想や中味を得、ひそかに自家薬籠中のものとし、時にあたかも自分の独創であるかのように発表する。自然科学を除き、人文科学の分野のものにこの種の非独創的なものが罷り通っているのは昨今はじまったわけではない。明治期以来、われわれ日本人は欧米の文物を撰取することに汲汲として今日に至ったが、未だに欧米の研究者が書いたものを後生大事にし、新刊本が出ると、すぐそれを追い求め、かれらの糟糠を食することを止めてはおらぬのである。

われわれ日本人は、本国の研究者と同じ土俵で研究を競うことができるであろうか。洋学は究極の学事となり得るだろうか。やり方によってはそれも可能だと思われるが、道はまだまだ険しく遑遠である。筆者はこれまでにポーの伝記〔文壇の異端者―エドガー・アラン・ポーの生涯〕ゆまにて出版、絶版）を一つとフランスにおけるポーの移入史〔異常な物語の系譜―フランスにおけるポー―三修社〕を著したが、それらはどれも二次、三次資料に基づいて書いたもので、本邦において他にまとまった類書が無かった点を除くと、そこには独創のかけらも見出せぬしるものであった。今、顧みるとあと味の悪さと恥らいを禁じ得ない。執筆に際して、本国の研究者の論著に多く依拠して

おり、祖述の一語に尽きるのである。しかし、二十年来、少しずつ蒐集した本邦におけるポー文献（明治期～現在まで）がだいたいまとまったので、ポー関係の最後の仕事として「日本におけるポー」（翻訳・批評史、文学的影響）をまとめたいと願っている。外国人がこの種の研究を手がけることは容易ではないであろうから、これこそある意味では日本人にしかできぬ恰好の研究テーマかと思われる。

国籍を異にする外国作家の運命と影響をたどろうとする研究は、かなりの時間と資料と財力と労苦をとまうため、人は熱愛家でないかぎりなかなか手をつけないのがふつうである。が、研究というものは本来労多くして効少なしというか、多くの無駄と犠牲と困苦は付き物なのである。日本の外国文学研究家の多くは、祖述作業を好み、しかも小さなテーマで隅をほじくるようなことを好むようだが、そのような類いの研究をやめぬ限り、いつまでたっても外国の研究者に顔向けができないはずである。われわれはできることなら本国の研究者にも日本人の研究の意義を多少とも認めさせるようなことをやらねばならぬと思う。そのような意味からも、比較文学（史）は恰好の研究分野であろうし、年々大小の論著が世に問われて来ているのは嬉しいかぎりである。

一 外国作家の受容史を究めようとする研究は、諸外国においてよく行なわれるもので、枚挙にいとまがないほどである。この種の研究では、たとえば既に述べたようにフランスは不朽の名著（フェルナン・バルダンスペルジェの「フランスにおけるゲーテ」一九〇四年、「同書誌」一九〇七年）を、さらにはジャン・マリ・カレ（仏人）の「イギリスにおけるゲーテ」一九二〇年）などを生みだした。またことポーの受容史に関する大きな業績としては、ジョン・E・エンゲルカーク（米人）の博士論文「ラテンアメリカ文学におけるエドガー・アラン・ポー」（一九三四年）やジョアン・トレイニイ・グロスマン（米人）の「ロシアにおけるエドガー・アラン・ポー——伝説と文学的影響の研究」（一九七三年）、カール・L・アンダーソン（米人）の「北極光におけるポー、その生涯と作品に対するスカンジ

ナビア人の反応」(一九七三年)その他がある。

わが国ではどうかといえ、日本におけるポーの運命・影響史の研究に初めて先鞭をつけたのは、比較文学者の島田謹二博士(一九〇一―一九九三)と明治文化研究家としても著名な木村毅博士(一八九四―一九七九、評論家・文学史家)である。前者は「日本におけるエドガー・アラン・ポー」(立教大学『英米文学』昭和28・12)と題する小論をまず発表し、のち『近代比較文学——日本における西洋文学定着の具体的研究』(光文社、昭和31・6)に再録し、さらに加筆修正したものを『日本における外国文学——比較文学研究(下巻)』(朝日新聞社、昭和51・2)に再び載せた。この小論はタイトルが示すように、わが国におけるポーの受け取り方を素描したものであり、ポー受容の鳥瞰図を得るにはよき手引となる。けれど島田博士の論著は、概して博引旁証に欠いておる場合が多く、この小論にしても必ずしも學術論文と呼ぶにはいささかためらいを覚える。後者の木村博士は、『英語青年』(昭和32・7―12、同33・2―3)に「Poeと明治文学」と題する記事を連載し、つづいて「ポーの日本伝来考」(『英語英文学』一、二月合併号、研究社、昭和34)を発表し、さらにこれらの記事に加筆したものを「ポーと明治大正文壇」(『日米文学交流史の研究』所収、講談社、昭和35・5)に再録した。木村博士の叙述は、やや粗雑であり、けっして精細なものではないが、内容的にはひじょうに面白いものである。しかも豊富な情報量を含んでおり、先駆的な第一級の研究といつても過言ではない。これにつづく研究は鈴木幸夫(一九二一―一九八六、小説家・英文学者、早大文学部教授)の「ポーと日本」(『日米フォーラム』第13巻第10号所収、昭和42・10)である。これは講演筆記であり、木村博士の研究を参酌し、それに管見を加えたものである。

これら四人のあとに輩出したのが、佐渡谷重信(一九三二―、英文学者・比較文学者、西南学院大学教授)である。氏は「日本におけるエドガー・アラン・ポー」(『西南学院大学英語英文学論集』9―2、昭和44・11)と題する長編

論文を発表した。その内容は、(1)明治期の英語教科書とポー (2)ポーの発見者・丹乙馬 (3)明治期における翻訳の状況 (4)大正期における翻訳の状況 (5)評価と影響——一般的侵透度と文壇での評価、「帝國文学」「早稲田大学」「太陽」の評価、日本における感化と影響(岩野泡鳴、谷崎潤一郎、佐藤春夫、萩原朔太郎、江戸川乱歩他)である。佐渡谷はこの論文を修正加筆し、のちに「エドガー・A・ポー」と題して、大著「日本近代文学の成立——アメリカ文学受容の比較文学的研究(下)」(明治書院、昭和52・8)に収録し、さらにそれに手を加えたものを「日本近代文学におけるポーの影響」(「ポーの冥界幻想」所収、国書刊行会、昭和63・10)として発表した。佐渡谷論文は明治・大正期のポーの受容が中心であり、ここにおいて戦後の昭和三十年代にはじまったわが国のポー受容史の研究は、一つの高まりを見せたといえる。佐渡谷がこれまでに発表した論著は、いずれも堅実な手法で書かれたものばかりであり、しかも実証性に富み、信頼に足る立派な研究である。今のべた木村・鈴木・佐渡谷三氏の研究はいずれも早稲田派の業績である。ここにつづく研究は、福田光治(一九二七)、英文学者・比較文学者・立教大学教授の「ポー」(教育出版センター「欧米作家と日本近代文学」の第五卷「英米篇Ⅱ」所収、昭和51・9)である。これは日本におけるポー受容史の包括的研究ではないが、ひじょうに示唆に富む立言がなされている。饗庭箕村、内田魯庵、岩野泡鳴、萩原朔太郎などのポー受容と変容についてふれている。

これらの先達につづいたのが拙論「日本におけるエドガー・アラン・ポーの運命——明治期」(法政大学教養部「紀要」(一)七)まで連載、昭和52・8(59・1)である。これは今のべた五名の諸先学の研究を踏まえた上で、新たな知見を加えて執筆したものである。

次に純然たる学術的論文とはやや性格を異にする「ポー書誌」について述べてみたい。日本におけるポー書誌の研究に先鞭をつけたのは、市井の書誌学者として有名な品川力(つとむ)(一九〇四)の「日本におけるポオ」(日本比較文

学会会報」昭和31・1(35・4)である。青年時代にポーの詩を愛唱し、ポーの短篇にも親しんだ氏は、多年日本におけるポー文献の蒐集をつづけ、のちにその豊富なコレクションを「日本近代文学館」に寄贈した。品川のポー書誌は、自分であつめたわが国のポー文献を基礎として発表したもので貴重なものである。これにつづく書誌的研究は、太田三郎博士(一九〇九―一九七六、比較文学者・千葉大学教授)の「ポオ紹介のあと」(東京創元新社『ポオ全集』付録「月報」(1)―(3)に連載、昭和38・6―12)である。これは品川力や木村博士の労作を参考にし、ポー移入史を「文献によってつたえながらおもしろく」書いたものである。小記事ながら貴重な参考資料である。このあと十年ほど空白がつづくが、ポーの研究者内田市五郎(一九三六―、英文学者・共立女子短期大学教授)が、日本人のポー研究史を究めた「日本におけるE・A・ポウ研究文献目録 昭和43―47、昭和21―28」(東京都私立短期大学協会委託研究紀要)(昭和47―48)を発表し、さらに「日本で発行されたE・A・ポウの注釈つきテキスト一覧」(大修館「英語教育」昭和60年九月増刊号所収)を作成した。

このあとにつづくのは中村 融(一九三一―、英文学者・茨城大学教授)の「日本でのポー(1)―(15)」(茨城大学教養部の「紀要」に連載、昭和52―平成6)である。ポーの書誌的研究では、わが国で最もすぐれたものであり、精細をきわめている。同論文の作成に費やした長い歳月と労苦を多とせねばならぬ。その他、書誌的なものでは、「ポオ翻訳一覧表」(『寶石』第四卷第一〇号「ポオ百年祭記念」昭和24・11)、品川力の「寥々ならざるポオ文献」(『日本古書通信』一六七号、昭和33・3・15、のち『古書巡礼』青英社、昭和57・10に再録)、国立国会図書館編「明治・大正・昭和 翻訳文学目録」(風間書房、昭和34・9)、「明治・大正・昭和邦訳アメリカ文学書目」(原書房、昭和43・?)、「明治翻訳文学年表」(『明治翻訳文学集』所収、筑摩書房、昭和47・10)、「ポー、E・A」(国立国会図書館参考書誌部編「雑誌記事索引——人文・社会編、一九七〇―七四所収、紀伊国屋書店、昭和52・10)、「Poe.

Edgar Allan] (二〇世紀文献要覧大系 3 外国文学翻訳文献要覧 I (英米文学) 編 一九六五―七四所収、

日外アンシエーツ、昭和52・3) などがあるほか、古書店のカタログ「特集 日本におけるE・A・ポー」(下井草書房刊『下井草通信24号——英米文学』平成4) などもあり、いずれも資料的価値のたかい、必見の文献である。

ポーが生まれた一八〇九年はわが文化六年にあたる。前年の五年八月には英艦フエートン号が長崎湾に侵入するという事件があり、時の長崎奉行松平康英は引責自殺した。外国船の闖入があつてか、翌文化六年十月長崎の蘭通詞らはロシア語と英語の学習を命じられた。ポーの生国アメリカでは、この年特記すべき出来事はないが、ヨーロッパでは四月に第五回対仏同盟が成立している。ポーが没したのは一八四九年、わが嘉永二年にあたり、同年三月米艦ブレブル号が長崎に来航し、漂流民を受取り帰航するが、翌四月に英艦マリーナ号が測量のため浦賀・下田に入港した。そのため幕府は、外国船打払いの可否を諸大名に諮問した。フランスはこの年、上海に租界を設けた。

ポーが生きた時代は、わが文化・文政・天保・弘化・嘉永にわたる約四十年間である。かれが初めて世に問うた作品は、詩集『タマレーンその他の詩』(カルヴィン・F・S・トマス、ボストン、一八二七年刊、時にポー十八歳) であるが、同作品およびその後諸雑誌に発表した詩篇や物語などが開国以前の日本に紹介されたといった痕跡はない。ポーの普及に貢献したルーファス・W・グリズウォールド編『ポー著作集』(四巻) の発刊をみるのは、ポーが亡くなった翌年の一八五〇(嘉永三) 年である。かりに来航した米艦の乗組員がポーの作品が載っている雑誌等を船中に持ち込んでいたとしても、鎖国下の日本にポーが移入されたとは考えにくい。一八五三(嘉永六) 年のペリー艦隊の来航、一八五八(安政五) 年の開国後、わが国を訪れず欧米人の数も飛躍的に増加した。が、外国船の乗組員の手を経て欧米の有名無名の文学作品がのった雑誌や版本が日本人の手にわたり、わが国の土地に流れ入りはしなかつたか。その中にはポーの作品も紛れこんではいなかったであろうか。この点に関しても依るべき史料がないので何ともいえ

ない。今のところ、幕末期ボーの名はまだ知られず、いわんや作品に至っては日本に入っていないと考えてさしつかえなからう。

徳川時代は、家康が江戸に幕府を開いた慶長八（一六〇三）年から慶応三（一八六七）年、徳川慶喜が大政を奉還するまでの約二百六十年間を指すのであるが、やがて王政復古の大号令とともに新政府が樹立する。明治時代の到来、新生日本の誕生である。しかし、新しい時代の夜明けを迎えても国内世情は不穏であり、江戸無血開城後も上野の戦い、会津戦争、五稜郭の戦い等がつづき、一種の内乱状態を呈した。やがて戊辰戦争（一八六八―六九）の結果、佐幕勢力は打倒され、天皇を中心とする中央集権的な国家体制が敷かれる。新政府は明治二（一八六九）年七月、廃藩置県を断行したのち、開明的な政策を実施し、富国強兵、文明開化を推進した。これと相俟って欧米の文物の輸入が盛んとなり、急激な西洋化現象が生じた。まず衣食住が欧化され、馬車・人力車・ランプ・ガス灯などの流行をみた。しかし、新政府が近代化や中央集権化を急速に押し進めている間にも、国内的には諸問題が山積し、明治九（一八七六）年廢刀令が出るや、士族の反乱（神風連、秋月、萩）があいついで起り、やがてそれは翌十年の西南戦争（一八七七・二―九）へと発展し、その後はさらに自由民権運動がいちだんと高まりをみせるようになる。

一方、出版文化史の側面から観ると、明治初年には旧幕時代の木版にかわって活版印刷が行なわれるようになり、書籍や新聞・雑誌の刊行や洋書などの輸入などがさかになる。さらに開化期の文学についていえば、明治初年には未だ江戸時代の文学の流れがそのまま受けつがれ、内容や形式ともに戯作（俗）文学の伝統がつづいたが、やがて社会変革と社会意識にめざめた知識人によって外国文学の翻訳が盛んとなる。外国文学の輸入移植は明治になって初めて行なわれたのではなく、その淵源をたどると、豊臣時代の文禄年間にはじまり、幕末に至ってそれが開花したといえる。嘉永初年ごろ、黒田麴廬（一八二七―九二、幕末・明治初期の語学者）がイギリスのダニエル・デフォー（一

六六〇―一七三二)の名作『ロビンソン漂流記』(一七一九年)の第一部の梗概をオランダ語から訳し、「漂流記事」(全六冊)と題して上梓し、ついで安政四(一八五七)年横山由清訳「魯敏遜漂流行紀略」(一冊、瓊華書屋刊)が同じくオランダ語から重訳されている。文久元年(一六六二)には、神田孝平(一八三〇―九八、明治期の啓蒙的官僚学者)が、J・B・クリステマイエル著「体刑の物語の重要な場面」(一八三〇年)の中から二篇抜いて「楊牙兒奇獄」と「青騎兵並右家族共吟味一件」を訳出した。

このような文学書の翻訳紹介につづいたのが、新聞の刊行である。幕末ころから、世相や世論に対する関心から新聞(官版「バタビア新聞」洋書調所編〔文久二年―一八六二年〕、「海外新聞」洋書調所編〔文久二年―一八六二年〕、「日本毎日新聞紙」會譯社編〔文久三年―一八六三年〕、「横浜新聞」會譯社編〔文久三、四年―一八六三、四年〕、ジヨセフ・ヒコ編輯発行〔慶応元年―一八六五〕、「横浜新報もしほ草」岸田吟香編、ウエン・リート刊〔慶応四年―一八六八年〕)等の刊行をみるのである。維新後の劈頭を飾った翻訳は、明治二(一八六九)年、幕臣河津孫四郎がフランス語から訳したといわれる「西洋易知録」(西洋史の大綱)である。次いで明治四年、寧静学人こと石川彝は、ピクター・パレーの物語風「万国史」を「西洋夜話」(養愚堂)と題して発表し、翌五年には斎藤了庵署名の「魯敏遜全伝」(二冊、鐵線書屋)が刊行された。これは「ロビンソン・クルーソー」の邦訳としては第三番目にあたる。同六年「イソップ物語」の抄訳「通俗伊蘇普物語」(渡部温訳、山城屋)、七年「西洋流別奇談」(小林謙吉訳、寶文堂)、八年「開発暴夜物語」(アラビアン・ナイト)の抄訳、永峰秀樹訳、山城屋)などが刊行された。

明治九(一八七六)年は、ポーの移入史からいえば重要な年である。同年、東京開成学校の英語の教材として「アンダーウッド」氏著 英文学神珍しんじん」が用いられているからである。御雇教師のジェームズ・サマーズ(英人)と外山正一が、主としてイギリス文学を中心に同テキスト(「イギリス作家編」)を用いたが、アンダーウッドの教科書

(英米両作家編二冊から成る)の「アメリカ作家編」(一八七二年刊)には、ポーの略伝と「大鴉」の詩が載っている。明治九年当時、東京開成学校で用いたアンダーウッドの教材(「イギリス作家編」?)は、おそらくポケット型の訳注本(未見)であろう。じっさいの教育において、このテキストをどのように用いたのか判断としないが、原書のほうと並行して使用したのか。「アメリカ作家編」はこの年の「開成学校一覽」に記載されていないが、ほぼ「イギリス作家編」と同時にわが国に入ったものと考えたい。「アメリカ作家編」はその頃テキストとして用いられなくても、一部の好學の士の目にふれたと考えられるし、ポーの略伝や「大鴉」なども精読とまではゆかなくとも拾い読み程度なされたかも知れぬ。

明治九年の政治および社会的動向にふれると、同年二月日朝修好条規(「江華条約」)が結ばれ、士族の秩禄^{ちやく}処分が完成している。十月には神風連の乱・秋月の乱・萩の乱と士族の反乱が相ついで上、三重・愛知・岐阜・奈良などで地租軽減要求の農民一揆が起っている。明治十(一八七七)年は西南戦争が起った年である。「この戦争は、当時の日本としては非常な大事件であったので、これの済むまでは、文学移入などのことも、あまり頭になかった」(柳田泉「西洋文学の移入」ということだが、翌十一年から十二年あたりになると、西洋文学に対する違和感もうすれ、国文学や漢文学と同じように、文学として日本人に親しまれるようになった。アンダーウッドの教科書は、東京大学「明治十年に名称変更」において明治十二年まで用いられた形跡がある。しかし同十三年以後もそれが引き続き使用されたといった記録はない。けれども明治十年代の初頭に、ついにポーの刊本(イングラム編「ポー選集」四巻)がわが国に輸入され、当時の東京大学の学生らに読まれるに至り、さらに新聞(「東京日々新聞」明治14・5・27付)にポーのエピソード(「詩人金を借る策」)が初めて紹介された。⁶⁾また明治十年代は翻訳の全盛をしめた時期でもあり、新刊書の大半がそれで占められた。リットン、スコット、シェイクスピア、ヴェルヌ、デュマ、シルレル、プー

シキン、デフォ、ユーゴー、ゲーテ、ボッカチオ、ルソー、フェノロサ等の著述が翻訳された。

日本文学史の上から述べると、明治初年から十八、九年ごろまでは啓蒙時代と呼ばれ、ことに明治初期は、江戸文学の系統をひく戯作文学（仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』、『安愚楽鍋』など）がまだ江湖の好評を博す一方で文明開花の風潮が勢いをまし、福沢諭吉によって西洋の諸制度および文物が紹介され、ここにおいて英米の自由思想や功利主義思想が移入され、次いで中江兆民や新島襄らによってフランスの自由平等思想やキリスト教主義的な啓蒙活動がさかんであった。明治十年代になると、自由民権運動が活発化すると相俟って政治小説の隆盛をみた。が、その他演劇・和歌・俳諧にしてもみるべき作品は少ないようだ。ともあれ日本の近代文学は、まったく外国文学との絶縁の中で発達してきたものではなく、その底辺においてたえず接触を重ね、受容と反発をくり返しながら成長してきたのである。この時期、まだポーの翻訳は現われず、ポーの「大鴉」を収録しているアメリカの英語読本（『スウィントンの第五読本』や『バーンズのニュー・ナショナル第五読本』）などが全国の学校で用いられ、ポーを知るもの数が徐々にふえて来た。

第一期の啓蒙時代（明治元年―一八、九年ごろ）^①に次いで第二期の新文学発生時代（明治一八、九年―同二七、八年ごろ）を迎える。この時期は開化期における欧化主義と西洋の文物の摂取吸収が一応一段落し、その反動として新たに国粹尊重の風潮がおこり、三宅雪嶺・井上円了・杉浦重剛ら政教社の人々によって雑誌『日本人』（明治21・4）が創刊され、西欧帝国主義や藩閥官僚らを攻撃し、一方徳富蘇峰の民友社は雑誌『国友之友』（明治20・2）を創刊し、欧米流の平民主義をスローガンに青年層の政治・社会思想を指導し、インテリの人気を博した。他方、江戸文学の復古や東洋美術なども再認識され、明治の新文学の誕生を示す坪内逍遙の『三歌当世書生氣質』（明治18・6・19・1）がベストセラーとなり、それに啓発されて二葉亭四迷が『浮雲』を著し、リアリズム文学の先駆けとなった。外国文

学の紹介について述べると、相変らずそれは盛んであり、スコット、ゲーテ、シェイクスピア、ヴェルヌ、リットン、デュマ、ボッカチオ、プーシキン、バニヤン、トルストイ、ツルゲーネフ、セルバンテス、シルレル、グリム、ポアコベ、ガポリオ、ラム、エインワース、ディケンズ、ホフマン、ドーデ、ユーゴ、バルザック、モリエール、ロチなどが訳され、一部単行本として世に問われ、あるいは諸雑誌に発表された。とくに明治二十年代は、ポーの作品の紙(誌)上紹介という点から重要である。英語が読める文学者によるポーの短篇の翻訳が現れるようになったからである。まずその口火を切ったのは、小説家・劇評家として令名の高かった饗庭篁村である。別号を「竹の屋主人」とも称した篁村は、外国語を得意としなかったが、友人から口訳をしてもらい『読売新聞』に縮訳したポーの翻案小説「黒猫」(明治20・11・3/11・9)、「ルーモルグの人殺し」(明治20・12・14/12・23/12・27)、「めがね」(明治21・1・3/20まで十五回連載)など三篇連載した。次いで評論家・小説家の内田魯庵が「黒猫」の本邦初の正訳を「鳥留好語」(明治26・9)に収録し、次いで翻訳王の異名がある森田思軒が「秘密書類」(「盗まれた手紙」)を「名家談叢」(明治29・1・20)に発表したのにつづいて、「間一髪」(「葬と振子」)を「太陽」(明治29・2)にのせ、のち単行本『袖珍小説第二編 間一髪 思軒居士訳』(博文館、明治30・1・5)として世に問うた。翻訳とは別に短いながらも初めて邦文によってポー伝や「大鴉」の訳が、訳注本・米国文学史・議義録等において姿をみせたのも明治二十年代である。

この間、政治的な主な出来事としては華族令が制定され(明治17・7)、秩父事件がおこり(明治17・10)、第一次伊藤内閣が成立し(明治18・12)、やがて大日本帝国憲法の發布をみ(明治22・1)、ついで第一回帝国会議が開催された(明治23・10)。その後大津事件(明治25・5)と日清戦争がおこり、後者は戦争終結後の講和を経て三国干渉をうけた(明治28・4)。

次いで第三期の浪漫主義時代（明治二七、八―三七、八年ごろ）が到来する。この時期、従来の伝統的規範や風俗に反抗し、何物にも拘束されぬ新しい自我に目覚め、西欧的文化の洗礼と教養を身につけた青年文学者（北村透谷、島崎藤村）などが輩出し、さらに与謝野鉄幹、同晶子夫妻らは雑誌『明星』を主宰し、ローマン主義を発現し、泉鏡花は神秘と虚構の美に富んだ独自の文学を創造し、ニーチェの哲学、日蓮の人と精神に深く傾倒した高山樗牛^{ちゆうぶ}は詩的、ローマン主義的色彩の濃い評論活動を展開した。外国文学の翻訳では、これまでに紹介された作家に加えて、新たにバーネット、ブロンテ、ステイブンソン、ポー、マーク・トウェイン、ドストエフスキー、ゴンチャロフ、ゴルキー、チェホフ、レルモントフ、コルネイユ、ゾラ、モーパッサン、ドーデ、イブセンなどの作品の多くが文芸雑誌等に載った。ほぼこの間に雑誌『文学界』（明治26・1）や『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』（明治28・1）などが創刊されている。

政治的な出来事としては、旧幕時代からの宿敵であった治外法権の撤廃に成功し（明治27・6）、第二次松方内閣の成立をみ（明治29・9）、やがて北清事変がおこり、日本は出兵する（明治33・6）。日英同盟を締結し数年を経ずして日露戦争が勃発し（明治37・2）、ポーツマス条約の調印によって平和が訪れる。

ポーの世界文学上の位置と人と芸術の特徴が、はじめて東大の文学の講義においてエリートに伝えられたのは明治二十年代後半から三十年代にかけてである。それを説き明かした人はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）である。ハーンはあまりポーを真正面から論じたりはせず、多くは他の作家や文学上の思潮や英文学に及ぼせる外国文学の影響等の点に関連して講じるのだが、きれぎれにせよ教場で多角的にポーに言及したのはハーンが最初である。かれがたびたびポーにふれたのは、この作家の内に自分にあるようなロマンティックな気質や妖美性に対する偏愛を認めただけである。ハーンのポー文献（富山大学図書館蔵）が示すように、ポーはかれにとって好きな作家のひとりであった

ことは疑いなく、その作品を愛読してやまなかつた。

またこの時期、文芸雑誌の中にはポーの名に言及したり、ポー小伝・小詩・評論・短編などを掲載するものも現れるようになった。さらに野口米次郎コホシロウのようにアメリカにおいてポー詩集に開眼され、詩の世界に分け入り、やがてポーまがいの詩作を試みて、剽窃の疑いをかけられる者が現れた。

さいごに来るのが第四期の自然主義時代（明治三七、八、四五年ごろ）である。自然主義は十九世紀後半にフランスのエミール・ゾラを中心として起り、モーパッサン、ドデー、ゴンクール兄弟らに継承されていった文芸思潮で、人生や社会のありのままの姿を直視し、たとえ醜悪なものでも目をそむけず、現実をそのまま描こうとするもので、わが国へは明治後期に伝わった。日本にこの思潮が伝わり、一時期流行をみたのには、いくつかの社会的条件が理由として考えられる。この時期、日本の資本主義は大いに躍進をとげ、産業界は重工業時代に入ったときでもあるが、それに伴って労資間の対立が激化した。とくに日露戦争（明治37―38）の勝利を契機として資本主義経済の矛盾や貧富の格差、不況と生活不安などから社会意識にいつそう目覚め、現実に向かうとする機運が生じた。その先駆けとなつて「破戒」（明治39・3）を著したのが島崎藤村であり、その他田山花袋・国木田独步・岩野泡鳴・徳田秋声・正宗白鳥・島村抱月らがそのような行き方をえらんだ。

この時期の外国文学の移植では、新たにメーテルリンク、ビヨルソン、キイランド、ガルシン、レオバルデイ、ダヌンチオ、コナン・ドイル、マーク・トウェイン、キプリング、アーヴィング、ゴールド・スミス、シェリダン、ハーデイ、スウィスト、イエーツ、ジャック・ロンドン、ハイゼ、ホフマンスタール、シュニッツラー、リルケ、ハプトマン、トマス・マン、アンドレフ、メレジュコフスキー、アナートル・フランス、レニエ、ゴンクールなどの作品が紹介され、それらは主に文芸雑誌等に掲載された。

政治上の出来事として、ポーツマス条約に不満をもつ民衆が、日比谷焼打ち事件（明治38・9）をおこし、翌年第一次西園寺内閣が成立し、さらに南満州鉄道株式会社設立をみる。ついで第二次桂内閣の成立（明治41・7）、伊藤博文のハルビンにおける暗殺事件（明治42・10）、幸徳秋水ら社会主義者の弾圧（大逆事件、明治43・6）などがおこり、やがて日韓併合が行なわれた。さらに関税自主権をようやく完全に回復し、特別高等警察（特高）が設置された（明治44・5）。

明治三十年代から明治末年にかけて、わが国の文学者の中からポー紹介にかかわる者が大勢現れるようになり、毎年のようにかれらはポーの人と作品について、評論や翻訳の筆をとり、文芸雑誌にさかんに発表した。得能文が書いた「薄倅詩人ポー」（『無尺燈』明治31・1）を皮切りに、島山古瓶・厨川白村・武田桜桃・野口米次郎・相馬御風・西村渚山・中里介山・岩野泡鳴・夏目漱石・上田敏・高田早苗・浅野和二郎・生田長江・平田禿木・塩谷栄・片上天弦・島本巷楽などがおもにポー論（評論）により、一方長田秋澍・山県五十雄・上村佐川・厨川白村・片上天弦・花生・畑荷香・西村醉夢・本間久四郎・深沢由次郎・森鷗外らは、ポーの短篇と詩の翻訳を文芸雑誌等に発表することによって、このアメリカの鬼才の伝播に大いに一役かった。

明治期、西洋文学の紹介に貢献した主な雑誌は、「帝国文学」「国民之友」「新小説」「文章世界」「太陽」「学燈」「早稲田文学」「文芸倶楽部」「教育雑誌」「女学雑誌」などであり、新聞では「郵便報知」「朝野新聞」「報知新聞」「読売新聞」などを挙げる事ができる。ことにポーの紹介に寄与した雑誌としては、「庚寅新誌」「国民之友」「青山評論」「同志社文学」「早稲田文学」「英文学研究」「英語青年」「文芸倶楽部」「太陽」「帝国文学」「文章世界」「新古文林」「日本及日本人」「文庫」「智徳会雑誌」等を挙げる事ができ、また新聞では「東京日々新聞」「読売新聞」などがある。明治文学史上、ポーが翻訳されたのは、主として明治二十年代からであるが、かれが断続的にせよたびた

び訳されたのは、時代の嗜好や傾向、何よりも紹介者の好みにもよるのであろうが、ポーの作品がもつ特異性や紹介するの到手頃な長さであったことも考慮されねばならぬであらう。ポーの作品が翻訳紹介されるのと相俟って批評が行なわれるようになったことも事実だが、まだ本格的な翻訳の開始には程遠かった。ポー翻訳が緒につくのは大正期に入ってからである。

大正期（明治^{こんたご}45・7―大正^{こんたご}15・12）は、日本史上、自由主義的な文化がいちばん開花した時期ともいえる。第一次世界大戦（一九一四―一八）に勝利を収めた結果、日本はいっそう資本主義国家として躍進を遂げ、国際的地位も向上した。政治的には旧来の薩長閥の勢力も衰えたこともあり、藩閥官僚政治を脱皮し、政党政治時代に入っていた。やがていわゆる「大正デモクラシー」の風潮が社会全体に広まってきた。国民生活についていえば、明治期から漸次つづいた西洋風な生活様式がいちだんと加速され、電気・ガス・水道などが普及し、洋服・洋髪・洋食などが更に一般化し、大衆娯楽として新たにラジオや映画（活動写真）などが関心を引いた。文学の潮流としては、明治三、四十年代から大正初期にかけて、自然主義はその最高潮に達したわけであるが、とくに明治末頃よりそれに対する反動として、森鷗外や夏目漱石のような非自然主義作家の活躍が目立つようになってきた。

またさまざまな文芸思潮と流派が現れるようになったのも大正時代の一つの特徴である。耽美派・白樺派・新思潮派・新感覺派・プロレタリア派と呼ばれる文学者たちの活躍が顕著になったばかりか、大衆・児童文学の方面での進出も注目をあびた。一方、大正期の外国文学の移植と受容についていえば、この時代も明治期に劣らず翻訳活動は盛んであったが、いちばん影響力があったのは、ロシア文学の翻訳紹介であり、とりわけトルストイ、ドストエフスキ―をはじめ二十世紀初頭のモダニズム文学が移植され、それらは人生と社会に関する積極的関心と呼び起したとされ⁹る。フランス文学では、象徴派や同時代の詩人たちの作品が盛んに翻訳され、イギリス文学ではシェイクスピア（坪

内)、ワイルド(本間)、コンラッド(日高)などが、さらにアメリカ文学では、ホイットマンの詩(『草の葉』その他)が有島武郎・白鳥省吾・富田碎花らによって訳され、民衆詩派の人々に感化を与えた。大正時代全般の社会的風潮として、自由主義や個人主義的気分がみなぎっていたせいも、何よりも第一次世界大戦後の民主的傾向の強い市民社会に強い刺戟となるような斬新な文学を紹介しようといった意図から出たものか、ポーの作品がしきりに翻訳紹介された。明治期、ポーの作品が訳されても単行本で上梓されるといった場合はまれであったが、大正期に入ってからようやく単独での刊行をみるのである。このことはこの時期のいちじるしい特徴として挙げることができる。

(散文)

- 『赤き死の仮面』(泰平館書店、大正二年(一九一三)七月、谷崎精二訳)
- 『かぶと虫・渦巻・没落』(北文館、大正二年(一九一三)五月、岡田実麿訳)
- 『楕円形の肖像』(越山堂、大正八年(一九一九)十二月、布施延雄訳)
- 『外国妖怪小説集』(日日堂書店、大正十三年(一九二四)五月、南馬源郎訳)
- 『赤き死の仮面』(金剛社、大正十三年(一九二四)九月、平野威馬雄訳)
- 『探偵黄金虫』(博文館、大正十四年(一九二五)一月、吉田両耳訳)
- (訳注文)
- 『リヂイア』(建文社、大正十五年(一九二六)六月、葉河憲吉訳)
- 『アッシュ家の没落』(建文社、大正十四年(一九二五)九月、幡谷正雄訳)
- 『黒猫』(建文社、大正十四年(一九二五)三月、浜林生之助訳)
- 『ポー傑作集』(南郊社、大正十四年(一九二五)五月、勝田孝興訳)
- 『鋸山奇談』(アルス、大正十一年(一九二二)七月、戸川秋骨訳)

(詩集)

『ボオ詩集』(越山堂、大正十一年(一九二二)十二月、若目田武次訳)

『ボオ全詩集』(聚英閣、大正十二年(一九二三)七月、佐藤一英訳)

『ボオ全詩集』(紅玉堂書店、大正十五年(一九二六)四月、伊藤喬信訳)

大正時代のポーの翻訳紹介といっても明治期のその延長線上にあり、とくに目新しいものは無く、概ね同じような傾向がみられる。明治期のポーについていえば、人と作品についての断片的な紹介の域を出ず、多くは英語の教科書やポー著作集に添えてある簡単な伝記的スケッチの類いを利用して書いた印象を与えるもので、ポーその人に肉迫した研究はまだ生まれていない。けれど大正期に入ると、ようやく文学者・英文学者らによってポーへの接近も徐々に本格化し、学問的になってくる。こういった機運が醸成された裏にあるのは、従来の単なる翻訳紹介に飽き足らぬものを感じ、ポーを研究対象として取り組んでみようといった自覚に目覚めたからであろう。しかし、ポーの取り上げ方や研究法に、わずかながら日本人としての創意が見られつつも、内容的には未だポーの人と作品に深く悟入するまでには至っていないのではなからうか。

大正期、まず学問的にポー研究に迫ったのは、吉江喬松の長編論文「エドガア・アラン・ボオ」(『近代詩講話』所収、大正4・1)と岩野泡鳴の「米國に於ける悪魔主義の發酵」(『悪魔主義の思想と文芸』所収、大正4・2)である。この両者とはほぼ同時期に、羽田銳治も「アラン・ポーと其中毒文学」(『近代文豪の肉体的研究』所収、大正4・3)において、ポーのアルコール中毒と作品との関係にメスを入れた長編論文を発表した。次いで主なところでは、白鳥省吾、塩谷栄、高安月郊、辻潤、日夏耿之介、野口米次郎、小酒井不木、木村毅、谷崎精二などもそれぞれユニークなポー論を展開している。が、いずれも雑誌等に発表したもので、単行本として結実したものではない。しかし、小

冊子ながらポー入門書に近い「ポオ評伝」(第一書房、大正15・3)を讀書界に提供したのは野口米次郎である。すなわち、同書こそある意味でわが国における学究的なポー研究書の第一号といえる。

ポー受容史の上で、明治末から大正期のもう一つの特徴は、それまでの一方的な移入移植・紹介の域を脱して、消化吸収の段階に入ったことである。すなわちまったく異質の外国文学の内容を意識的、無意識的に吸収同化し、新たな文学作品を創造する試みがなされるようになったことである。換言すれば、ポーの波動がはつきり現われ、感化や影響をうけた文学者(作家)が姿をみせるようになったことである。まず明治二十年代にドイツでの留學体験を経て、文学界に入り、小説・翻訳・評論の分野で浪漫主義運動を展開し、その指導的地位にあつた森鷗外は、「うずしほ」「十三時」「病院横町の殺人犯」等をドイツ語訳から重訳することからポーの世界に入つてゆき、「雁」「スバル」に明治44・9―大正元・11まで連載)における登場人物(語り手の「私」と岡田)の日常の習慣と趣向、「窓の女」お玉の旦那末造の観察眼に富む人物設定、主人公のひとり石原の推理過程の例証法など、ポーの「モルグ街の殺人事件」にみられる道具立てを巧みに生かした。これらはポーから案じついたものと考えて差しつけえなからう。その他ポーの系譜に連なる文学者に、岡本綺堂、泉鏡花、岩野泡鳴などがいる。岩野泡鳴の「三界独白」と「ときはの泉」にポーの「大鴉」が波動し、北原白秋の「青い髯」にはポー的雰囲気が揺曳している。明治末の日本文壇に耽美主義・悪魔主義を標榜して登場した谷崎潤一郎は、のちに古典への回帰や女性美・女性崇拜・被虐症ソドミチズなどを主要なテーマとしたが、「刺青」(明治43・11)にポーの「ベレニス」と「リジニア」が、「金色の死」(大正3・12)に「ウィリアム・ウィルソン」「アルンハイムの地所」「ランダーの小屋」等が影を落とすし、「魔術師」(大正6・1)には「アッシュヤー家の崩壊」の雰囲気が漂い、「白昼鬼語」(大正7・5―7)においては、「黄金虫」に出てくるような暗号を意識的に使用している。谷崎の初期の文学作品はポーの影響裡に書かれたものが多く、かれはポーから作品の構想、猟

奇的妖美趣味、文章美⁽¹⁰⁾などを学んだようだ。

近代人の孤独やニヒリスティックな思想感情を病的な感覚をもって謳ったとされる萩原朔太郎は、早くからポーに親炙し、「鷄」（大正12・1）と「猫の死骸」^{ニコ}と呼べる女に「沼沢地方」^{ニク}と呼べる女」等において、「大鴉」の「またあらじ」の反復句^{ツクレシ}の効果、ポー的な気分や象徴や心象風景を用い、とくに後者の作品において、「ウラリユーム」から得たモチーフや技法を生かした。大正期の詩人中、難解な詩語と幽玄神秘を偏愛したことで知られた日夏耿之介の「青年美童」や「訪問」に、「大鴉」の心象風景が転写されている。谷崎と同じように耽美派に連なる文学者に佐藤春夫がいる。佐藤は氣質、体質的にポーと似たものを感じ、その作品を愛読したが、「指紋」（大正7・7）に「アッシャー家の崩壊」や「黒猫」が、「青白い熱情」（大正8・1）に「アナベル・リー」の感化が著しく、「西班牙犬の家」（大正6・1）に至っては「ランダーの小屋」ばかりか、ゲーテの「ファースト」（第一部）の影響が濃厚に現われている。一方、第四次『新思潮』（大正5、創刊）で文学界にデビューした新現実派の芥川龍之介になると、ポーの創作の哲学から入り、漸次作品に迫ってゆき、創作の骨法を自作に応用しようと考え、意欲的にポーの著作を愛読し、「尾生の信」（大正9・1）においては、ポーの「大鴉」に出てくる反復句（「またあらじ」）の効果を意識的に応用した。新感覺派の中河与一もポーに親しみ、「肉親の賦」（大正15・1）の中で「勝利者の虫」の詩節を意図的に引き、さらに「赤い薔薇」（大正10・6）に、「赤死病の仮面」と「アッシャー家の崩壊」が投影されている。大仏次郎が初めて発表した時代物「隼の源次」（大正13・3）に登場する村田数馬と源次の人物描写は、「ウィリアム・ウイリソン」から暗じついたものである。

日本を代表する探偵小説家・江戸川乱歩（平井太郎）は、そのペンネームが如実に物語っているように和製エドガー・アラン・ポーである。乱歩は早稲田の学生時分にポーを発見したことが契機となり、その後探偵作家の道を歩む

ようになるのだが、デヴュー作となった「二銭銅貨」（大正12・4）に「黄金虫」「モルグ街の殺人事件」「盗まれた手紙」の影響が認められる外、「踊る一寸法師」（大正15・1）の着想に「びよんびよん蛙」が波動している。大正期の文学者たちに与えたポーの影響をひとわたり目を通すと、以上の通りである。

昭和期のポー受容を論じるにあたって、便宜上、それを昭和元年（一九〇六）から同二十年（一九二五）までを第一期（昭和前期）とし、太平洋戦争終結後の昭和二十年から昭和六十四年までを第二期（昭和後期）として二分することにする。第一次世界大戦後の世界各国を襲ったのは大不況であり、高度資本主義国家を標榜する日本もその例外ではなかった。大戦後の不況にあえぐ日本経済に追い討ちをかけたのは、大正十二（一九二三）年九月に発生した関東大震災である。その混乱のさなかに、多くの朝鮮人・労働者・社会主義者たちが虐殺された。資本主義体制下での矛盾が生んだ社会主義・労働運動は、大震災後の弾圧や共産党の一時的解党などの影響を受けて右派の台頭を生み、やがて左派との軋轢を醸成した。ことに大正十二年の大震災が日本の社会全体に与えた衝撃は大きく、大正十四（一九二五）には護憲三派内閣のもとで一応多年の懸案であった普通選挙法の成立をみたが、社会・労働運動を取締るために治安維持法が制定された。この弾圧法規の社会に与えた影響は深刻であり、国民の言論・思想の自由はすっかり奪われてしまった。

一方、世界の強大国、先進資本主義国としての日本は、経済的不況・人口増加などの行きづまりの解決策として、目を満州や中国大陸に向け、対中強硬外交を推進し、昭和初年以後、帝國主義化はいちだんと加速され、政党政治は終焉を迎え、代わって軍部の台頭をみる。やがて軍部による独裁体制は、満州事変（昭和6）、第一次上海事変（昭和7）、五・一五事件（昭和7）、国際連盟の脱退（昭和8）、二・二六事件（昭和11）、日華事変（昭和12）、ノモンハン事件（昭和14）、日独伊三国軍事同盟の締結（昭和15）、太平洋戦争の開始（昭和16）とひたすら戦争へと傾斜して行き、ついに昭和二十年（一九四五）八月の敗戦といった破局を迎えるのである。

他方、社会的観点からいえば、日本は大正から昭和期にかけて、「大衆社会」の時代の到来をみたのである。資本主義経済は、賃金労働者・事務職員を多量に生み、国民大衆は言論統制下にあつて、カフェ・酒場・遊里・劇場に出入りし享楽にふけり、退嬰的になつた。とくに大正末から昭和初期にかけて性愛やゲロテスクなものが流行した。知識人・文化人は、将来に対する漠とした不安や焦燥から、虚無的となり、中にはマルクス主義に走る者も出てきた。マルクス主義は、労働組合運動だけにとどまらず、文学・芸術・思想・学問の分野にまで浸透したが、それに対する官憲による弾圧は、容赦なく加えられ、プロレタリア運動に限らず民主主義的・自由主義的な思想や文化活動も封殺された。天皇制国家主義にそぐわない一切の思想は、弾圧を受ける運命にあつたのである。また出版文化の面では、大正十五年に刊行された改造社の「現代日本文学全集」（全63巻）、俗にいう「円本」（一冊一円均一）が昭和初期をピークに爆発的に売れ、その余波は各社の出版物にまで及び円本合戦が始まつた。

次に昭和前期（戦前まで）の文学界の形勢をみると、大正十年代から昭和十年ごろまでプロレタリア文学（「革命の文学」をめざす）の全盛期であり、その他新感覚派（横光利一、川端康成）、新興芸術派（井伏鱒二、梶井基次郎、堀辰男）などが生れた。昭和前期のポーに関する刊行物について述べると、明治・大正期と比べて飛躍的に伸び、枚挙にいとまがない。まずポーの訳業から眺めると、大正期と比較にならぬほど多くの単行本（訳本）が出ている。

（散文）

『エドガー・ポー』（日向新しき村出版部、昭和二年（一九二七）五月、小林秀雄訳）

『タル博士とフェザア教授の治療法』（南宋書院、昭和二年（一九二七）九月、龍膽寺曼訳）

『ポー、ホフマン集』（改造社、昭和四年（一九二九）四月、江戸川乱歩訳）

- 「エドガア・ポオ集」(博文館、昭和四年(一九二九)十二月、平林初之輔訳)
- 「ポオ小説全集」(全5巻、第一書房、昭和六年(一九三一)―同八年(一九三三)七月、佐々木直次郎訳)
- 「ゴルドン・ピム物語」(春陽堂、昭和八年(一九三三)三月、岩田寿訳)
- 「黒猫―他六篇」(岩波書店、昭和九年(一九三四)三月、森村豊・沢田卓爾共訳)
- 「アッシュア家の没落」(新潮社、昭和九年(一九三四)十月、谷崎精二訳)
- 「詩の原理」(研究社、昭和十年(一九三五)二月、村上不二雄訳)
- 「詩の原理」(椎の木社、昭和十年(一九三五)二月、阿部保訳)
- 「大鴉」(野田書房、昭和十年(一九三五)三月、日夏耿之介訳)
- 「ユウレカ」(山本書店、昭和十年(一九三五)五月、西村孝次訳)
- 「ユウレカ」(芝書店、昭和十年(一九三五)八月、牧野信一・小川和夫共訳)
- 「マルジナリア」(芝書店、昭和十年(一九三五)十一月、吉田健一訳)
- 「大鴉」(光昭館書店、昭和十一年(一九三六)三月、日夏耿之介訳)
- 「鋸山奇談」(山本書店、昭和十一年(一九三七)八月、戸川秋骨訳)
- 「狂瀨院」(山本書店、昭和十一年(一九三七)九月、内藤吐天訳)
- (訳注本)
- 「黄金虫講義」(健文社、昭和三年(一九二八)七月、葉河憲吉訳)
- 「ブローズ テールズ」(東邦書院、昭和四年(一九二九)一月、百瀬甫訳)
- 「ポー短篇集」(研究社、昭和四年(一九二九)一月、大橋栄三訳)
- 「ポー短篇集」(英文学社、昭和四年(一九二九)七月、深沢由次郎訳)
- 「ブローズ・テールズ」(春陽堂、昭和七年(一九三二)五月、山本供平訳)
- 「近眼鏡篇」「黄金虫篇」(外語研究社、昭和九年(一九三四)六月、深沢由次郎訳)
- (詩集及び詩論)

「エドガー・アラン・ポー訳詩集」(興文社、昭和十一年(一九三六)十一月、杉本長英訳)

「ボオ詩論集」(岩波書店、昭和十五年(一九四〇)十一月、益田道三訳)

昭和前期は、以上述べた単行本に加えて語学雑誌・文芸誌などにも、数多の訳業が掲載されたことはいうまでもない。特筆すべきは、関東大震災の社会に「大衆文学」(時代小説、家庭小説、ユーモア小説、探偵小説等)の時代が訪れ、文学は従来の文学愛好者、文学的教養人といった限られた読者層から、さらに広汎な読者層にまで裾野が広がってきたことである。各種の新聞・通俗雑誌は大衆向けの文学作品を連載し、それが大いに受けた。探偵物も流行し、ことに大正十年代から昭和十年代にかけて、「新青年」は毎年のようにポーの短篇の翻訳(多くは自由訳)やポー論・探偵作家論などを載せたが、それまで特定の読者しか持たなかったポーは、この「新青年」を媒体として一般大衆レベルまで浸透して行った。

次に昭和前期の邦人によるポー研究について瞥見してみたい。昭和期に入ると、ポーの名はかなり浸透してきたせいか、文学者・英文学者などの手により、各人各様のスタイルで数多の論著・評論・エッセイ風記事などが現出する。ポーのアカデミックな捉え方の一般的傾向については要約することは容易ではない。が、昭和初期においては、短篇小説といった文学形式を確立したポー、恐怖の作者ポー、短篇作家・詩人としてのポーとその技巧、ポーと他の文学者の関連性などについて論じられ、昭和十年代に入る頃より、ポーとフランス文学との連関を追求した比較文学的論考が現われ、さらに病理学的に見たポー像などが描かれるが、大正期の研究と比べて、テーマ・方法論のどれ一つとっても、大きな違いはないようだ。要するに、ポーは一層多角的に眺められるようになったということか。特筆すべきポーの長編論文としては、島田謹二の「ボウ短篇集」(「英語英文学講座」所収、昭和9・7)、「ボウとポウドレエル

―比較文学史的研究―(台北帝大文学科研究年報)所収、昭和10・9)、日夏耿之介の「エドガア・アラン・ポオ年譜」「ポオ伝覚書」「ポオの青春時代」「大鴉縁起攷」「大鴉余説」「洛陽之酒徒ポオ」(「英吉利浪漫象徴詩風」の(上)(下)所収、昭和15・11・16・2)などがある。またポーの純然たる研究書(単行本)はまだ生まれないが、ポーの入門書的な本に益田道三著「エドガア・アラン・ポー」(弘文堂書房、昭和16・9)がある。

昭和もこの時期になると、語学的精度も加わって、ポーの人と芸術についての全体像がかなり正確に把握されるに至った印象をうける。が、研究の素材となっているものは欧米の学者の仕事であり、日夏の研究に日本人としての獨創性が若干みとめられるものの、多くは祖述を基礎とし、そこに自分の意見を差しはさんだものでなからうか。

泥沼化した日中戦争の打開策として日本は、南進策を採ったが、それが英米との激しい対立を招いた。ことに第三次近衛内閣が成立した昭和十六(一九四二)年七月、日本軍が南部仏印(仏領南部インドシナ)へ進駐を開始した時点で、アメリカの態度はいっそう硬化し、在米日本人資産の凍結と石油の対日輸出禁止をもって応じ、英蘭二国もこれに同調したので、時の東条内閣はついに開戦に踏み切った。太平洋(大東亜)戦争の開始である。しかし、日本は緒戦においてこそ勝利を得たが、ミッドウェー海戦で惨敗したのを機に、サイパン・硫黄島・沖縄を次々と失ない、やがては原爆投下とソ連の参戦により昭和二十(一九四五)年八月、ポツダム宣言を受諾し、ここに太平洋戦争は終了した。

戦後、日本の政治体制ばかりか国民生活は大きな変革を遂げ、明治期以来の軍国主義国家にかわって民主主義的な文化国家として再出発することになった。戦後の日本を特徴づけているのは風俗の急速なアメリカ化である。アメリカ文学の翻訳紹介もアメリカニズムと無縁ではなく、一般受けするような現代作家の小説などが逸早く翻訳されている。ポーのように古典的な文学作品ですら、時流に乗るかのようになり、昭和二十年代をピークに盛んに訳された。が、

三十年代の高度成長期に入るとやや下火になる。第二次世界大戦後、はや半世紀ちかくなるが、この間の主なる訳業（単行本）について述べてみよう。

（散文）

- 『盗まれた手紙』（明朗社、昭和二十一年（一九四六）十一月、川越鬼訳）
『早過ぎた埋葬』（創文社、昭和二十二年（一九四七）四月、谷崎精二訳）
『黄金虫』（大虚堂書房、昭和二十二年（一九四七）八月、落沢忠技訳）
『黒猫』（美和書房、昭和二十二年（一九四七）十月、岸本彰訳）
『妖精の島』（蒼樹社、昭和二十二年（一九四七）十月、谷崎精二訳）
『ボオ傑作集』（大泉書店、昭和二十二年（一九四七）十月、谷崎精二訳）
『ボオ選集』（実業之日本社、昭和二十三年（一九四八）五月、中野好夫監修）
『赤い死の舞踏会』（若草書房、昭和二十三年（一九四八）六月、吉田健一訳）
『エドガア・ポー』（ポードレールのポー論、角川書店、昭和二十三年（一九四八）七月、小林秀雄・佐藤正彰共訳）
『偷まれた手紙』（昭和出版社、昭和二十三年（一九四八）九月、佐々木直次郎訳）
『黒猫』（銀燿社、昭和二十三年（一九四八）九月、黒田義輝訳）
『病院横町の殺人犯』（角川書店、昭和二十四年（一九四九）一月、森鷗外訳）
『アッシャー家の崩壊』（青磁社、昭和二十四年（一九四九）三月、松村達雄訳）
『われ発見せり——ユウレカー』（創元社、昭和二十四年（一九四九）十月、西村孝次訳）
『ボオ物語集』（横浜巖松堂、昭和二十四年（一九四九）十一月、金勝久訳）
『ボオ』（『世界文学全集』河出書房、昭和二十五年（一九五〇）二月、中野好夫他訳）
『ボオ短篇集』（広文堂、昭和二十五年（一九五〇）九月、田中準訳）

- 【ポー作——短篇集】（白羊書林、昭和二十六年〔一九五二〕三月、関西英米文学研究会訳）
- 【黒猫・黄金虫】（新潮社、昭和二十六年〔一九五二〕八月、佐々木直次郎訳）
- 【黒猫】（岩波書店、昭和二十八年〔一九五三〕五月、中野好夫訳）
- 【黒猫・黄金虫他・白鯨】（世界文学全集）河出書房、昭和三十一年〔一九五六〕一月、中野好夫他訳）
- 【ポオ、ポオドレール】（世界文学大系33）筑摩書房、昭和三十四年〔一九五九〕七月、阿部知二他訳）
- 【ポー代表作選集】（三卷、鏡浦書房、昭和三十五年〔一九六〇〕八月）三三六〔一九六二〕一月、刈田元司他訳）
- 【^本定エドガア・アラン・ポオ小説全集】（五卷、春秋社、昭和三十七年〔一九六二〕五月）一、谷崎精二訳）
- 【ポオ全集】（三卷、東京創元新社、昭和三十八年〔一九六三〕八月）一、十二月、阿部知二他訳）
- 【ポオ短篇集】（八潮出版社、昭和三十九年〔一九六四〕八月、田桐大澄訳）
- 【黒猫・黄金虫】（旺文社、昭和四十一年〔一九六六〕五月、刈田元司訳）
- 【黒猫・黄金虫】（新学社、昭和四十三年〔一九六八〕十月、佐々木直次郎訳）
- 【アッシャー館の崩壊・黒猫】（世界文学18）集英社、昭和四十五年〔一九七〇〕七月、吉田建一他訳）
- 【ホーソン・ポー】（『新集世界の文学7』中央公論社、昭和四十六年〔一九七二〕七月、丸谷才一他訳）
- 【黄金虫・黒猫・アッシャー家の崩壊】（講談社、昭和四十六年〔一九七二〕八月、八木敏男訳）
- 【ポー名作集】（中央公論社、昭和四十八年〔一九七三〕八月、丸谷才一訳）
- 【ポオ小説全集】（四卷、東京創元社、昭和四十九年〔一九七四〕六月）一、九月、阿部知二他訳）
- 【ポオ／ホーソン——黄金虫・黒猫／緋文学】（『世界文学全集32』講談社、昭和四十九年〔一九七四〕九月、八木敏男他訳）
- 【ポー——アッシャー家の崩壊　メルヴィル　タイピール】（『世界文学全集14』集英社、昭和五十一年〔一九七六〕二月、富土川義之他訳）
- 【ポオのSF1】（講談社、昭和五十四年〔一九七九〕七月、八木敏男訳）
- 【盗まれた手紙】（国書刊行会、平成元年〔一九八九〕三月、富土川義之訳）
- 【ホーソン　ポー】（『新装　世界の文学セレクション36』中央公論社、平成六年〔一九九四〕三月、工藤昭雄他訳）

(訳注本)

- 【¹The Black Cat² 他三篇】(南雲堂、昭和二十八年〔一九五三〕一月、菊池武一訳)
- 【¹The Black Cat² 他三篇】(研究社、昭和二十八年〔一九五三〕二月、大橋栄三訳)
- 【ボ一傑作選集】(南雲堂、昭和二十八年〔一九五三〕九月、林原耕三・山内義雄共訳)
- 【裏切る心臓】(泰文堂、昭和三十二年〔一九五七〕九月、藤田美広他訳)
- 【黄金虫・黒猫】(金星堂、昭和三十七年〔一九六二〕六月、池田義一郎訳)
- 【E・A・ポー作品集】(北星堂、昭和四十四年〔一九六九〕九月、郡山・菊池共訳)
- 【モルグ街の殺人】(評論社、昭和四十九年〔一九七四〕七月、清水良雄訳)
- 【対訳ポー 黒猫・リジア・盗まれた手紙】(昭和五十年〔一九七五〕十月、菊池武一訳)
- (詩集及び詩論)
- 【ボオ秀詞】(洗心書林、昭和二十二年〔一九四七〕十月、日夏耿之介訳)
- 【エドガア・ボオ詩集】(酣燈社、昭和二十五年〔一九五〇〕五月、島田謙二訳)
- 【ボオ詩集】(創元社、昭和二十五年〔一九五〇〕五月、日夏耿之介訳)
- 【ボ一詩集】(新潮社、昭和三十一年〔一九五六〕十一月、阿部保訳)
- 【ボオ詩集】(弥生書房、昭和四十二年〔一九六七〕七月、阿部保訳)
- 【ボ一詩集】(世界詩人全集6) 新潮社、昭和四十三年〔一九六八〕十二月、入沢康夫訳)
- 【ボ一ポイットマン 詩集】(薔薇十字社、昭和四十八年〔一九七三〕三月、日夏耿之介訳)
- 【大鴉】(薔薇十字社、昭和四十八年〔一九七三〕三月、日夏耿之介訳)
- 【詩の原理】(弥生書房、昭和六十三年〔一九八八〕八月、阿部保訳)
- 【ボオ詩集／サロメ】(講談社、平成七年〔一九九五〕二月、日夏耿之介訳)

明治・大正期に、欧米で刊行された研究書が邦訳されることは絶えてなかったが、昭和四十年代からはつぼつ現れるようになった。左記に掲げるものがそれである。

- 「エドガー・アラン・ポー研究」(関西大学出版部、昭和四十三年(一九六五)十二月、松本政治訳)
 「ポーとフランス」(審美社、昭和五十年(一九七五)四月、中村融訳)
 「ポーとポードレル」(北星堂書店、昭和五十年(一九七五)十一月、松山明生訳)
 「夢みる人——エドガー・アラン・ポーの生涯」(牧神社、昭和五十三年(一九七八)六月、三上紀史訳)
 「告げ口心臓——E・ポオの生涯と作品」(東京創元社、昭和五十六年(一九八二)十二月、八木敏雄訳)

またポーの物語をやさしく書き改めて少年少女向きに紹介するようになったのも戦後間もない頃の現象である。その多くは、いわば翻案とでも呼べるものだが、主なる作品を次に掲げてみよう。

- 「月へ昇った男」(真光社、昭和二十三年(一九四八)八月、八木仁平訳)
 「渦巻」(広文堂、昭和二十四年(一九四九)五月、田中準訳)
 「黄金虫」(光文社、昭和二十四年(一九四九)六月、江戸川乱歩著)
 「こがね虫」(三十書房、昭和二十六年(一九五二)二月、光吉夏弥著)
 「月世界旅行」(小峰書房、昭和二十六年(一九五二)四月、谷崎精二訳)
 「怪奇と詩情」(ジープ社、昭和二十六年(一九五二)六月、著者不詳)
 「黄金虫」(講談社、昭和三十五年(一九六〇)十一月、江戸川乱歩訳)
 「名探偵シャーロックホームズ／黄金虫・黒ねこ」(学習研究社、亀山龍樹訳)
 「アッシャー家の没落」(岩崎書店、昭和五十年(一九七五)一月、久米元一訳)
 「黄金虫・黒ねこ」(春陽堂書店、昭和五十二年(一九七七)八月、亀山龍樹訳)
 「黒猫」(偕成社、昭和五十二年(一九七七)？月、大林清著)
 「エドガー・ポー怪奇・探偵小説集(1)(2)」(偕成社、昭和六十年(一九八五)三月、谷崎精二訳)

次に戦後から平成の現在までのポー研究の動向について、その概略を述べてみたい。太平洋戦争終結後の社会の混乱期、生き抜くのが精一杯であった日本人にポー研究に没頭できるだけの精神的余裕などは無かった。が、終戦の翌（昭和二十二年）年から翻訳活動と相俟ってポー研究が盛んとなり、雑誌に小論（評論）が発表されるようになる。ことに昭和三十年代以後は、象牙の塔におけるアカデミックな研究が一般化し、その成果は逐次「紀要」や英文学の専門誌などに発表され、今日に至っている。今、数多の研究について論じるだけの紙幅はないが、目ぼしいものだけを取り上げることにする。戦後程なくして現われた三宅鴻（英語学者、現在法政大学教授）の「Poe: The Masque of the Red Death」の文体論的考察」（『時事英語研究』昭和23・5）は、専門とする英語学の知識を援用しながら「赤死病の仮面」を徹底解剖したもので、他の追隨を許さぬ、きわめて独創的な好論文である。島田謹二（当時、第一高等学校教授）の単行本『ポーとボードレル』（イヴニング・スター社、昭和23・7）は、誤まりも少なからず見られるが、この種のテーマで邦人が書いたものの中で最良のものであろう。戦前、台湾で教鞭をとった島田は、台北帝大の紀要および諸雑誌にポー論を発表したが、上梓するにあたって、それらに手を加え一冊にまとめたものが本書である。この種の研究に手を染めた邦人は、島田の論著が現れる以前に何人かいたが、いずれも英米の研究家の仕事に依るもので、皮相的であり、簡単な紹介（小論）の域を出ないものであった。島田は、そうした英語しか読めぬ学者とは異なり、仏語をよくし、フランス人のポー研究を踏まえ、ポーとボードレルの文学的交流の軌跡をたどり、ボードレルの反応・訳業・影響などについて究めようとした。が、この研究は、対象が外国のものであり、自国文学を取り扱ったときに感じる内的共感や迫力に乏しく、大局をつかんだ点はよいとしても、著者みずから認めるように「敗戦記録」の一つであった。

これに続くポー研究の単行本は、精神科医野村章恒の「アラン・ポオ——精神病理解剖の立場から」（福村書店、

昭和24・2)である。野村は、同書においてポーの生涯を説き、次いで各作品を精神医学の面から分析した。昭和二十四年(一九四九)は、ポー没後百年に当たるところから、『英語研究』(研究社、昭和24・10)は「ポー特集号」を刊行し、中野好夫・斎藤勇ら第一線の英文学者九名が、個別のテーマで小論を寄稿し、ポーの人と作品の特徴を明らかにした。さらに十年後の昭和三十四(一九五九)年は、ポー生誕百五十年に当たり、『英語青年』(研究社、昭和34・5)は「エドガー・アラン・ポー特集」を組み、荒正人・斎藤光ら四人の英文学者が小論を寄せたが、十年前の「ポー特集号」(『英語研究』昭和24・10)のような敬慕的内容を含むものではなく、あまり興味を惹かぬ。

昭和三十年代から、日本におけるポー研究は次第に隆盛に赴くのであるが、三十年代に単独の研究書が二冊出ている。その内のひとつは中村順一が英文で著した *Edgar Allan Poe's Relations with New England* (『エドガー・アラン・ポーとニューイングランドとの関係』北星堂書店、昭和32・8)と、もう一つは一力秀雄(早大教授)の『評伝エドガー・アラン・ポー』(『広文堂書店、昭和35・11)である。前者は、主としてポーとニューイングランドの文学者との関わりについて論じたもので、中村こそ英文でポーの研究書を上梓した邦人第一号である。後者は、いみじくもタイトルが示しているようにポーの批評的伝記であるが、未完に終わっている印象を与えるのが惜しまれる。昭和四十年代に入ると、谷崎精二(早大名誉教授)の『エドガー・ポー——人と作品』(研究社、昭和42・12)、八木敏雄(成城大学教授)の『エドガー・アラン・ポー研究——破壊と創造』(南雲堂、昭和43・6)、江口裕子(東京女子大学教授)の『エドガー・ポー論考——芥川龍之介とエドガー・ポー』(創文社、昭和43・11)、小山田義文の『エドガー・ポーの世界——詩から宇宙へ』(思潮社、昭和44・10)、平井啓之(東大教授)の『ランボオからサルトルへ——フランス象徴主義の問題』(清水弘文堂書房、昭和43・8)などが相次いで刊行された。大正期から翻訳を通じてポー紹介に努めた谷崎のポーの研究歴はじつに長い。谷崎は同書において、マリー・ボナバルト女史の論著「エドガー・ア

ラン・ポー——生涯と作品」の英訳本を下敷きに、ポーの作品を精神分析の観点から解剖し、八木は、ポーの再評価、ポーの詩と愛の物語などについて、本国の最新の研究を踏まえた上で新機軸を出し、小山田は、ポーの創造の方法論、詩と詩論、天才と狂気、ポーと女性問題、ポーの韜晦趣味などについて論究し、江口はアメリカにおけるポー評価、ポーとその社会的、文学的環境について論じたあと、ポーと芥川の連関関係について初めてメスを入れた。その立論はいずれも説得力に富み、傾聴に値するものである。平井は、象徴主義の鼻祖と目されるポーの想像力、ポーの多元的諸相、ポーの詩篇のもつ意義、ポーの狂気について考察し、新解釈を出した。

昭和四十年代の一特徴は、各文芸雑誌が「ポー特集号」を組み、刊行したことである。季刊詩誌『無限』（政治公論社、昭和44・3）の「特集エドガー・ポー」において、島田謹二は、ポーの生涯、批評家・詩人・物語作家としてのポー像を描き、その他九名の新進気鋭の学者らも、それぞれポー小論を寄せ、さらに島田を中心にポー談義（「ポーシンポジウム」）を開き、各種各様の問題を提起し、多年の蘊蓄をおもいおもいに吐露した。「ユリイカ」（青土社、昭和49・2）も「ポー特集号」を刊行し、十二名の著名な文学者・学者らが評論やエッセイなどを寄稿した。昭和五十年代に入ると、「文章読本　ポー」（河出書房新社、昭和53・4）は、戦前・戦後に現われた著名な文学者のポー論や翻訳などをまとめて掲載した。次いで「カイエ」（冬樹社、昭和54・9）は「特集・エドガー・アラン・ポー」を刊行し、第一線で活躍する文学者・学者ら二十数名が、評論・エッセイ・翻訳（訳詩およびポー論）などを寄稿した。ポーの単行本が何点か出たのもこの時期のことで、拙書『文壇の異端者——エドガー・アラン・ポーの生涯』（ゆまにて出版、昭和54・11）につづいて、水田宗子の「エドガー・アラン・ポーの世界——罪と夢」（南雲堂、昭和57・6）、松山明生の「イエイツとボオの幽玄——比較文学論集」（北星堂、昭和57・9）、小川和夫の「わがエドガ

ア・ポオ」(荒竹出版、昭和58・11)、拙書「異常な物語の系譜——フランスにおけるポー」(三修社、昭和58・11)などの刊行をみる。拙書「文壇の異端者——エドガー・アラン・ポーの生涯」は、これまでわが国に詳細なポー伝が無かったことに鑑みて、欧米の学者が著わしたポー伝を下敷きにして描いたものである。水田はポーの怪奇的、幻想的、空想的、科学的小説の中心思想(グロテスク)を形作っている淵源を、西洋文学の伝統の中に辿り、ポーの文芸思想の本質の解明に努め、松山はイエイツと能、ポーと日本の近代詩人たちとの連関関係を究めようとした。小川はポーの方法論から説き、T・S・エリオットのポー論批判に言及し、拙書「異常な物語の系譜——フランスにおけるポー」は、フランスにおけるポー受容史を欧米の研究書に依拠して辿ったものである。

昭和五十九(一九八四)年六月、「英語青年」(別冊)は特集号を組み、「日本の英米文学研究——現状と課題」をテーマに、英米文学界の著名な学者二十六名の小論を掲載したが、「ポー」の章では、福田立明が日本におけるポー研究の最近の動向と将来の課題について総括した。昭和六十年代から平成期におけるわが国のポー研究は、相変らず盛況を呈しており、その成果は大学の紀要や各種の雑誌等に毎年発表されている。研究書も相次いで刊行され、伊藤詔子は「アルンハイムへの道——エドガー・アラン・ポーの文学」(桐原書店、昭和61・10)において、ポーとイギリス・ロマン派詩人との関係、ポーと都市・庭園譚について論究し、内田市五郎は「エドガー・A・ポウと世紀末のイラストレーション」(岩崎美術社、昭和61・11)を世に問い、ポーの作品に付された挿絵を取り上げ、それに解説を添えた。栃山美知子は「聖なるいかさま師 ポウ」(あほろん社、昭和63・3)において独特の作品論を展開し、佐渡谷重信は久々の著書「ポーの冥界幻想」(国書刊行会、昭和63・10)の中で、ポーの短篇の心靈美学、「大鴉」における幻魔の思想、ポーとフランス象徴派との関係、日本近代文学におけるポーの影響等について論及した。昭和六十四(平成元)年は、昭和天皇の崩御の年でもあるが、辻本一郎はアメリカで入手した資料を取り入れて大部な「ポ

オの短篇論研究」(風間書房・平成元・2)を世に問うた。佐渡谷はさらに「エドガー・アラン・ポー」(清水書院、平成2・9)を刊行し、同書の中でポーの生涯・芸術・思想の全体像を描いた。また最新刊としては、高島清著「小説家ポー」(国書刊行会、平成7・3)がある。

次にポーとの関わりの中で、その作品の中にポーが影を落しているその他の昭和期の作家についてふれてみたい。少年時代に早くも岡田実磨訳「かぶと虫・渦巻・没落」(北文館、大正2・5)を読んで深い感銘を受けた大岡昇平は、その後さらにポードレルの仏訳でポーの作品に親しみ、欧米人の書いた研究書にも目を通すようになった。「野火」(創元社、昭和27・2)や「俘虜記」(創元社、昭和27・12)に、ポーの「アーサー・ゴードン・ピムの冒険」と「葬と振子」「黄金虫」等が揺曳し、埴谷雄高はポーの内にグロテスク趣味の共通資性をみとめ、笑劇を好んだ三島由紀夫の「卵」(「群像」昭和28・5)は、「十三時」「ベスト王」「ボンボン」等に倣ったものである。また三島は、長編小説「愛の渴き」(新潮社、昭和25・6)において、いちばん人目につく所に物を隠して人の眼をごまかそうとする「盗まれた手紙」の中のエピソードを意識的に用いた。

日本におけるポー移入百二十年の鳥瞰図を描くと以上のようになるが、最後に説くべきは、日本の近代文学史上、ポーがいかなる位置を占め、またかれが明治・大正・昭和・平成の今日に至る約百二十年間にどのような受け取られ方をしたか、いわば各時代のポー像についてである。今、ポー受容を大観すると、およそ次の五つの時期に区分できようか。

第一期……明治九年から明治十八年ころまで(ポーの移入の初期段階)

第二期……明治二十年から明治四十五年ころまで(翻訳紹介とポーへの言及、評論の時期)

第三期……大正四年から大正十五年（昭和元年）ごろまで（翻訳紹介が活発化する中で、単独の訳本と学術論文が現われる。ポーの影響を受けた作家が現われる）

第四期……昭和元年から昭和十一年（昭和前期）ごろまで（訳本刊行の隆盛をみる。評論活動が盛んとなり、高度な学術的研究が進む）

第五期……昭和二十年から昭和四十年ごろまで（戦後の訳本刊行の一時的流行と学術的研究が本格化した時期）

第六期……昭和四十年から現在まで（ポー研究の盛況と研究書刊行の時期）

ポーが初めてわが国に移入され、日本人がこのアメリカの文学者の存在を知るに至った経緯を顧みると、ポー伝播の橋渡しの役割を演じたのは、ポー略伝とポーの代表的詩篇（「大鴉」）を収めた英語の教科書（アンダーウッドの「アメリカ作家編」）であり、ポーはまず英語や英米文学教育の一環として当時の知的選良（開成学校の学生）に読まれ、その存在が明るみになった。しかし、これは明治十年前後のことであり、その頃ポーはまだほとんど一般大衆に知られていなかったといつてよい。ちなみに当時の日本の人口は約三千八百万、現在の約四分の一である。明治二十年代に饗庭篁村によってポーの短篇三篇（「黒猫」「ルーモルグの人殺し」「めがね」）が、当時流行の自由翻案の形で『読売新聞』に連載され、ポーの宣伝に一役買ったが、これがどれほど読書界に原作者名の伝播に寄与したものか明らかでない。明治十四年ごろの『読売新聞』の発行部数は、一万七千ほどであったというから、同二十年代のそれは二万前後か、効果は至って小さかったと見ねばなるまい。その後、明治末に至る二十五年間に現われたポーの翻訳紹介や評論等にしても、一部の知識人や一般読者の目にふれたことはたしかだが、どの程度ポー理解とポーの名の普及に役立つものか確言できかねる。結論的にいえば、明治期のポーは、大学・専門学校・中学の知的選良や知識階級には働きかけはしたが、一般大衆にまでは浸透せず、等閑視されていた。近代日本の誕生とともに世界各国の文学が

わが国にどつと入り、翻訳紹介の洪水の中でポーは押し流され消えることなく、今日まで命脈を保って来た。が、明治期におけるかれの存在は、この時代にわが国に移入されたヨーロッパ大陸の大物作家と比べても決して大きくはなかった。日本の近代文学は外国文学の摂取と歩調をあわせて発展してきた観があるが、ポーを日本近代文学といった大きな流れの中で捉えようとする時、かれは翻訳文学の本流にはなれず、いわんや帰化することもなく、あくまで異分子的な存在におわり、はぐれ者であったといった観がふかい。要するに、明治文学史上のポーは、まだ確固たる足場を築かず、ヨーロッパ大陸から渡来した大作家の陰に隠れ、小さな存在でしかなかった。明治時代の一般的ポー像は、うす気味悪い、怪異な、病的傾向を作風とする作家、薄幸の抒情幽愁詩人といったところか。この時代、小説を本領とするポーの実像は、まだ理解されていない。

大正期に入ると、抒情詩人としてのポーを捉える傾向がやや薄らぎ、関心の中心は小説家としてのポー像に一層近づく。ポーの短篇小説の目ぼしいものが逐次、翻訳紹介されてゆく中で、ポーを近代の悪魔主義、象徴主義の始祖とする捉え方、病理学の側面からポーの内面にまで迫ろうとする動きが活発化する。その前駆を勤めたのは、吉江喬松、岩野泡鳴、羽田鋭治、白鳥省吾、辻潤、野口米次郎、小酒井不木、谷崎精二ら一連の研究者である。大正文壇もポーに並ならぬ関心を寄せ、その中から感化を受けた者も大勢現れるようになったが、この時代になると、アルコールに毒されながらも稀に見る才能を発揮して怪奇小説・探偵小説の逸品を書いたポー像が一般化した観がある。昭和期に入ると、ポーを知る者の数は飛躍的に伸び、短篇作家としてのポーの名声はほぼ定着し、外国作家のうちでも最も親しまれる小説家の一人となる。加えて詩人・小説家・批評家としてのポーの全体像がほぼ把握され、ことに戦後になると、その人と生涯と作品等がさらに説き明かされるに及んで、学問的な研究も深化し、研究対象も拡がり細分化する。以上がこの百二十年間のポー像の歴史的概観である。本稿はいささか無雑に書き連ねた観がなきにしもあらずだ

が、いずれ世に問うべき「日本におけるポー」研究の中間報告として観ていただけると幸いである。読者の諒想を希う。

注

- (1) Mary E. Phillips: Edgar Allan Poe. The Man vol. II The John C. Winston Co., Chicago, Philadelphia 1926, 一五二頁。
- (2) "The Evening News" Baltimore, Thursday, Sept. 30, 4 O'clock Edition, 1875 を参照。
- (3) Fernand Baldensperger: Goethe en France, Étude de littérature comparée, Librairie Hachette, Paris, 1904, 398p. in-8°. である。今、入手がむずかしい同書は、東京大学教養学部の「教養学科図書室」にゼロックスコビーを製本したものが架蔵されている。しかし、バルダンスベルジュが前書を書く際に材料のすべてを公開した書誌 (Bibliographie Critique de Goethe en France, Librairie Hachette, Paris, 1907, x + 251P. in-8°) は、同図書室に見当らない。なお、バルダンスベルジュの著作を解題したものに「バルダンスベルジュ書誌」(比較文学——特輯バルダンスベルジュ研究) 2 所収) がある。小伝については、島田謹二の「フェルナン・バルダンスベルジュの日本来遊」(日本における外国文学——比較文学研究 上巻) 所収、朝日新聞社、昭和 50・12) と同書下巻の「フランスにおけるゲーテ——一九六一年のゲーテ生誕記念日の講演」が参考となる。博大精緻な学識に基づいて書かれたバルダンスベルジュの著者は、どれも簡単に読める代物ではないが、[自伝] (Une Vie parmi d'Autres, Notes pour servir à la chronique de notre temps, Louis Conard, Paris, 1940, 377P. in-8°) は、この傑出した学者の生い立ちから徒弟・研究時代を知るうえで必読の文献である。バルダンスベルジュ (十七歳) が、たまたま自宅の書棚にあったゲーテの廉価版の中に見出した言葉、「よきヴァイオリン奏者になるよう練習に励め。オーケストラの指揮者は、汝がしめるべき譜面台の席をにこやかに与えてくれるだろう。汝の身を機関とせよ。そして、人が自らの意志で与えてくれる仕事を実生活の中で待つがよい」(「自伝」四十頁) に打たれたかれは、これを天の啓示として受けとめ、その後の人生の指針とした。ゲーテの教えは、不断の努力を旨とし、われわれの内にひそんでいる能力を開発せ

よ。才能の原基をしおれさすな。アマチュアの域を脱し、自己を完成せよ。要するに、きびしい自己鍛練と自己実現であった。

(4) *Tamerlane and Other Poems, by a Bostonian*, Calvin F. S. Thomas Printer, Boston, 1827()と。ポーが無署名で刊行した私家版の同詩集は、刊行当時、世の注意を引かず、ましてや書評の対象にもならなかった。が、ポーの名声が高まるにつれて、この処女作に対する関心が高まり、コレクターが熱心に捜し求めるようになった。現在では天草本などの稀覯本といっても過言ではない。しかし、この百数十年間に何度か姿をみせ、書籍商の手でオークションにかけられ、博物館・大学図書館・コレクターに渡った。幻の詩集「タマレーンその他の詩」が初めて市中に姿をみせ、アメリカの書籍商によって大英博物館に売却されたのは一八六〇(万延元)年のことで、当時の売値はわずか一シリリングであった。その後の十五年間、大英博物館に収蔵されたこの小冊子が現存する唯一のものと思われていた。が、一八七四(明治七)年ボストンの一書店の店員が、近くの店のパンフレットを入れる箱の中から件の詩集をみつけ、十五セントで買った。一八九二(明治二十五)年かれはそれをオークションにかけ、一八五〇ドル手に入れた。三年後の一八九五(明治二十八)年、バージニア州リッチモンドで詩集が発見され、さらに一九一七(大正六)年さらにもう一冊姿をみせた。一九二五(大正十四)年まで、わずか四冊が存在することがわかっていった。が、この年ウインセント・スターレットという者が、「サタデイ・イブニング・ポスト」紙に「お宅の屋根裏部屋に『タマレーンその他の詩』がありませんか?」といった記事を投稿した。この間合せ記事は直ちに反響をよび、まずマサチューセッツ州ウスターに住むエイダ・ドッド夫人が、持っていると言乗りをあげ、次いでニューハンプシャー州ナッシュアやニュージャージー州リッジフィールド近郊に住む市民ら二名が所持している、と連絡してきた。結局、スターレットの記事が出たことよって更に二冊、計六冊の存在が確認されたのである。

その後の約二十五年間、詩集が発見されたといったニュースは聞かれなかったが、一九五四(昭和二十九)年にニューヨークの書籍商が複製本を作った。しかし、この年の二月二十九日マサチューセッツ州の某コレクターがニューハンプシャー州の納屋の中から詩集を掘り出した。現在までのところ、十一冊発見され、うち九冊は公共機関に収蔵され、一冊はコレクターが所有し、もう一冊は行方不明である。最近、この珍本はニューヨークのサザビズのオークションにかけられた。このニュースを筆者に知らせてくれたのは、友人であった銀座の美術商中沢昭正氏(故人)である。氏は私がかねてよりポーに

関心があることを知っており、サザビズの回報を郵送してくれた。それによると、一九八八（昭和六三）年七月七日新たに発見された詩集（写真参照）は、サザビズのオークションにかけられた。推定値は二、三十万ドルとある。誰が入札で落としたものか定かでないが、おそらく値段からみて公共機関が落札したものであろう。筆者は先年、アメリカ滞在中に複製本を三十ドルで求めたが、版本の表紙はカーキ色、大きさは縦十八センチ、横十・八センチ、厚さ五ミリ、総ページ四十である。

(5) 片岡良一監修『文学五十年』（時事通信社、昭和30・9）、二六頁。

(6) 柳田 泉『西洋文学の移入』（春秋社、昭和49・7）、九一頁を参照。

これは当時早大教授であった柳田 泉の発見によるものである。今のところ、ポーの名が紙上に現われた最初のものと考えられる。柳田 泉著『西洋文学の移入』の一〇七頁には、ただ『東京日々新聞』（五月二十七日号）に、「詩人金を借る策」として、アメリカの詩人、エドガー・アラン・ポーの逸話が見える」とあり、掲載記事は引用されていない。

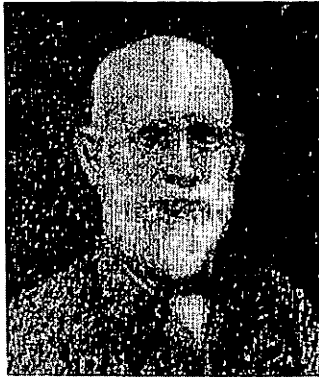
(7) 時代的区分および时期的な特色については、伊藤正雄著『要説 日本文学史』（社会思想社、昭和52・3）その他を参照した。

(8) 同右、一四九―一五〇頁。

(9) 荒正人「大正時代における外国文学の受け入れ」（『文学』一九六四 11、12）所収、岩波書店、六五頁。

(10) 『無限』XV 特集——エドガー・ポー、六八頁。

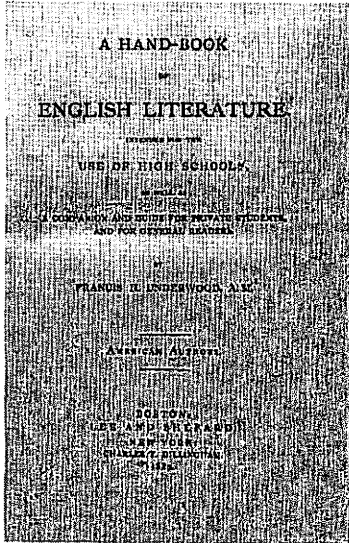
(11) 伊藤 整『日本文壇史——開化期の人々』（講談社、平成6・12）、一六八頁。



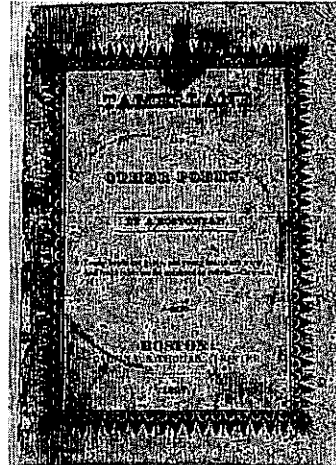
ポーの改葬に立ち会った寺男のジョージ・W・スペンス



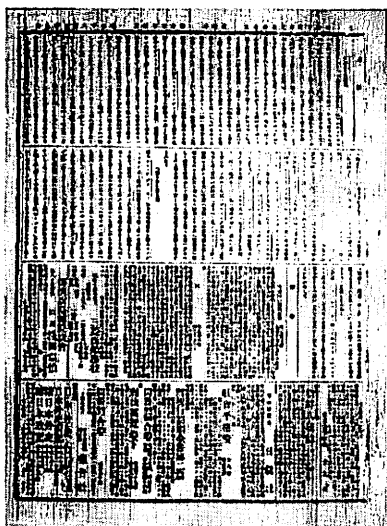
エドガー・アラン・ポーの肖像写真



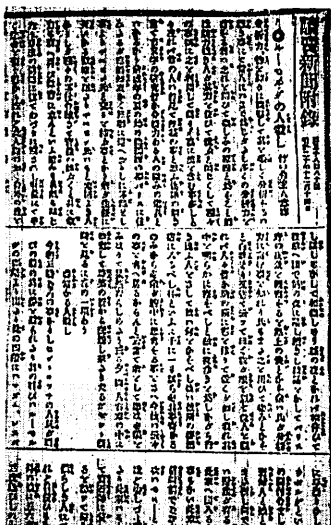
アンダーウッドの教科書（『イギリス文学便覧——アメリカ外家編』1872年刊）の扉、筆者収蔵



1998(昭和63)年7月7日、ニューヨークのサザビズのオークションにかけられた『タマレオンその他の詩』



ポーのエピソード（「詩人金を借る策」を紹介した『東京日々新聞』（明治14・5・27付））



塞庭苗村の挿話、「ルーモルグの入教し」を載せた『読売新聞』（明治20・12・14付）



内田魯庵訳「黒猫」を収めた『鳥留好語』（明治26年刊、筆者收藏）